

1. 寄 稿 文

水辺の景観設計

東京大学工学部教授

篠原 修

私の今日の話は、皆さんのお手元の資料の5ページに、ひどく素っ気なく書いた目次に従って進めたいと思います。学生時代から景観のことをやっておりました。昔は景観といえますと、私どもの立場からいえば、調査とか研究に専念していればよかったです、逆にいえば、実際には社会的ニーズが全くなくて、研究だけしていたのですが、ここ5、6年は実際の設計の仕事を手伝うことが多くなりました。特にこの3、4年は橋のデザインの仕事をお手伝いすることが非常に多くなりました。そこでつくづく思ったことは、学生時代にもうちょっと構造力学をちゃんと勉強しておけばよかった。又、ここ2、3年で、川のほうのお手伝いもすることが多くなってきました。後ほどスライドでお見せしますが、2、3の川の設計のお手伝いをしております。これも学生時代に河川工学といいますが、水理学といいますが、ちゃんと勉強しておけばよかったと思っております。

そんなわけで河川とか水理学の詳しい話はとうに忘れておりますが、実際に設計をお手伝いしている経験から、今日は川の景観や構造物のデザインについて、現場の方にどんなふうに考えていただきたいかということについてお話したいと思います。

目次の最初に、「近年の水辺整備とその問題点」と書いておきました。これは何も川に限らないのですが、つまり橋でも道路でも公園でも広場でもそうなのです。ちょっとお歳を召した人なら重々ご承知だと思いますが、昭和30年代、40年代というのは、高度成長時代といわれていた時代で、ともかく経済に見合った社会資本を早く整備してくれという時代でした。私は今でも覚えておりますが、私が会社に勤めた昭和46年頃は初任給が毎年20%か30%ぐらい上がっている時代で、たしか経済成長率は7%か10%ぐらいだったと思います。仮に10%としますと、7年間で所得がちょうど倍になる勘定で、そういう急激な経済の成長に対して、それを支える社会資本が足りない。つまり橋も足りないし新幹線も高速道路もない。川のほうには余りニーズがなかったような気もしますが、そんなことで、ともかく経済発展を支える公共施設を早くつくらないといけないというのが社会のニーズでしたから、じゃあどうしようかということで、皆さんよくご存じだと思いますが、建設省を中心にとられた政策が標準設計であります。

どういうことかということ、橋でも護岸でも規格化して、手間をかけずになるべく早くつくれるようにしようということです。私ども景観をやっている立場からいいますと、川の表情というのはいづれをとっても違うのですが、どこの川であろうが同じような橋をかける。どこの川であろうが、同じような護岸で施工するといった時代であったと思います。

これは我々土木の分野だけではなく、お隣の建築でもそうで、建築の芦原先生とお話したときに、「いやあ、篠原君、建築も魔の30年代だったよ」と言っておられました。新幹線を例にとりますと、東京から新大阪に行くまでに随分いろんな川を渡りますが、全部同じ形式の橋がかかっております。ワーレントラスという型式で色も灰色です。建築のほうも同じで、皆さんも経験があると思いますが、ちょっとぼやっとしていると、どこの駅を通過しているか全くわからない。土木も建築も規格化してなるべく早く安くつくろうという

時代でした。

それが昭和50年前後だったと思いますが、49年にオイルショックがあって、どうも一生懸命働いているのに、何か生活が豊かになった気がしない。どこかおかしいんじゃないか。私もその例に漏れず、民間の会社にいましたが、10時、11時まで一生懸命働いていました。仕事がおもしろかったということもあるのですが、そのわりに一向に生活が豊かにならないし、身の周りの環境も豊かな感じがしない。機能的ではありますが、そこで市民の間に反省が起こってまいりまして、もうちょっと違った価値観でモノをつくっていこう。我々の関係する分野でいいますと、橋をかけるにしても川を整備するにしても、もう少し快適な感じ、楽しい感じ、当時はやったのは「アメニティ」という言葉でしたが、アメニティ水準の高い施設にしてくれないかということが出てまいりました。

又、東京では余りピンときませんが、地方に行きますと、地域個性を考えた施設整備にしてくれないかということ非常に強くいわれます。つまり、かつてのようにどこでも同じように、例えば橋なら同じ橋をかけるのではなくて、我がまちにかけられる橋は、隣のまちと違う橋にしてほしいという要請が出てまいりました。つまり何か地域の歴史とか風土に根ざした個性的なものをつくっていかないと、地域に住んでいる誇りが持てない。若者も、我がまちはこういういいものがあるんだよという誇りを持って住むことができない。3番目に出てまいりましたのは、このごろ毎日のように新聞をにぎわしていきさかろうざりですが、御存知の環境問題です。生態系に配慮したものづくり、キャッチフレーズでよくいわれるのは“地球にやさしいモノづくり”にしてくれということで、こういう3つの要求が非常に強く出てまいりました。

詳しくいいますと、もっといろんな要求があるのですが、ざっとまとめますと、以上の3つの柱にまとめられるのではないかと思います。つまりアメニティ、個性（アイデンティティ）、エンバイロメントというかエコロジーというか、そういう要請が公共事業にも強く要請されるようになってきました。

しかし、昨日まで、なるべく早く安くつくってくれといわれたのが、急にアメニティのことを考えて設計してくれ、生態系を考えてくれといわれても、なかなかうまくいかないのも当然で、そういう要因が一つと、もう一つは土木出身の方ならよくご存じだと思いますが、大学あるいは高校のときに、学校の授業で生態学なんて習ったことがない。ましてや景観のことなんか習ったことがない、デザインのトレーニングは受けたことがないという状況ですから、そういうところの基本的な知識が欠けているにもかかわらず、現場では市民とか市長さんとか知事さんとかに、強くそういうことを言われて、何とか対応しなければいけないということで、試行錯誤、悪戦苦闘しているのが現状ではないかと思います。

それで、何が今、問題なのか。設計の現状を見ておきますと、さまざまな問題がございます。私は、どうしてこんなふうにも実際の設計がうまくいかなかったのだろうかということをしばらくの間考えまして、5、6年前から「シビックデザイン」という概念でやっていこうということを言い出したのです。お手元にあります1.(3)の「設計に欠けているもの」というのは、結局のところ2.に書いた、デザインというものがどういうものなのかよくわかっていない所から出ている。景観に配慮して設計するという場合、どこがキーポイントなのか、どうもはっきりしない。景観といわれると、何となく周辺と調和すればいいのではないかといった風に考える。あるいはそれがシビックデザインになるわけですが、ほかの分野のデザインと違って、後程簡単に申し上げますが、例えば服のデザインとか車のデザイン、つまりインダストリアル・デザイン（工業意匠）と、我々がつくらなければいけない河川の護岸や橋のデザインとは何が違うのか。要するに我々がきちっと考えなけ

ればいけないデザインに対する自覚が、不足しているのではないか。こんなふうに考えるに至ったのです。

恐らく他の講師の方は河川に中心を置いた話ではないかと思しますので、河川だけではない土木一般に通用する全般的な話を前半でいたしまして、後半は、うまく時間がとれるかどうか自信がありませんが、最近の河川の設計で私がよく知っているもの、あるいは私がかかわっているものをスライドでご紹介して、こんなふうに考えたらいいのではないかという話をいたします。

時間がありませんので、ひどく簡単にしか話せませんが、そこはご容赦願います。最初に、我々が考えないといけないのは、最終的にはシビックデザインになるわけですが、その前に、シビックデザインといいたしてもモノをつくるという行為には変わりありませんから、もともとモノをデザインするというのはどういうことだろうかという点です。学校でいうと小、中学校で学ぶ基礎になるのですが、先ほど言いましたように、土木系の学校では教えておりませんので、そこをもう一度確認していただきたいというつもりでお話いたします。

“よい形”の意味	
1)	対象：物（構造物、施設） 空間（物の間の隙間）
2)	前提：使われる（行動） 眺められる
3)	設計概念（指針） 多様な機能の要請
	a
	b
	c → 一つの形にまとめ上げる
	⋮
	⋮
例1	土木：「用・強・美」
例2	建築：「機能と形態」
	・要請されている機能に個別に対応し、それを足し合わせることではない。
	・景観＝調和にとらわれて、よい形の実現＝designの原点を忘れていく傾向

図－1 デザイン

と、その上が平らであって、物を置いたり、紙を置いて字を書けることが「要請」のaです。これが本来の要請です。河川では洪水にあったときに水があふれないということだろうと思います。

それだけだったら、そんなに頑丈につくる必要はないのですが。2番目に我々がよく経験するように、ちょっと高いところの物を取ろうとしたりすると、机を踏台にして使う。そういう使われ方もあるので、踏台にしても大丈夫なように頑丈にしよう。それが要請のbです。大学の場合でいきますと、これはちょっと特殊かもしれませんが、疲れたときにはその上で寝たい学生がいる。そんな要請もあります（要請のc）。たかが机でも考えてみると少なくとも3つぐらいの要請があるわけで、寝られる、字が書ける、踏台にもできるという要請にバラバラにこたえて、それを後でくっつけたのはいいい机にならないわけで、それらを一つの形にまとめるといえることが重要な点です。ここのところを最低限クリアし

デザインのことを議論し出すといろいろあって、例えば建築とか工業意匠のデザイン関係の本を見ると、本屋に幾らでもありますから大変ですが、我々が知っておかなければいけないと思うことを、1点だけ申し上げます。

私の考えでは、大事なことは、ここに書いておいたことだけです（図－1）。つまり、我々がつくらなければいけないものには常に多様な機能が求められていて、それにこたえなければいけないのですが、それらの要請にバラバラにこたえるのではなくて、それらを同時に考えて一つの形にまとめ上げる。これがデザインということです。これだけです。非常に簡単です。

今日は皆さんの机は余りいい机ではないので、うまく説明できるかどうかわかりませんが、机の設計ということを考えてみる

てもらわないと、いいものができない。

私が最近危惧しておりますのは、環境とか生態系を現場で考えられて、実際に河川の護岸なり堤防をつくっていくというのは、それはそれで非常に結構なことだと思いますが、ややもすると、かつての機能主義時代のように、今度は生態系のことばかり考えて設計するとすると、生態系の先生にはちょっと申し訳ないのですが、実際には非常に使いにくい。きれいな形にならない。場所に依じて、生態系のこと考えるし、利用のこと考えるし、景観のこと考える。もちろん治水のこと考える。そういう要請をすべて一度は全部一つのテーブルの上に乗せてみて、ここの設計はどういうウエートでいこうかと、こういうふうを考えていただかないと、また、かつてのような間違いを繰り返すのではないかと思います。その辺をスライドでお見せします。

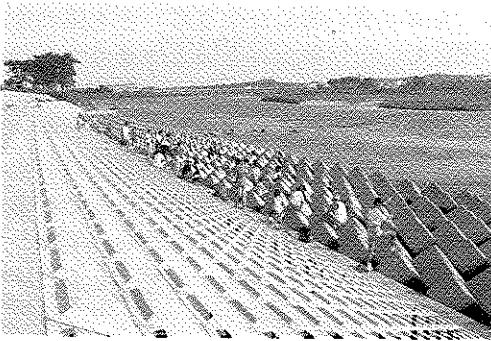


写真-1

だけではなくて、釣りをする場所でもあるし、水遊びに行くベースキャンプでもあるし、私は多摩川べりで育ちましたのでよくわかっておりますが、散歩すると実にすがすがしい、いい空間です。つまり、堤防、護岸にはいろんな機能が要請されているのです。

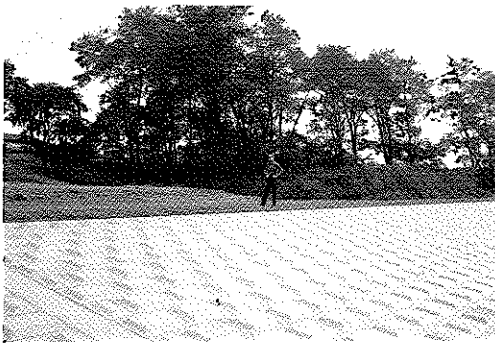


写真-2

子供でもわかると思いますが、緩くした分だけ今度は急な場合に比べてコンクリートの面積が増えます。そうすると景観により大きな影響を与えないかという、当然悪い影響を与えます。しかし、そっちのほうは考えない。ともかく水に下りて行きやすいということだけを考えて設計しておりますから。これがデザインかどうかという、デザインではない

写真-1はご承知のように機能主義、標準設計時代につくった護岸の典型だと思います。多摩川の中流部です。ごらんになるとわかるように、皆さんは河川の方だから、細かくは申し上げませんが、洪水のときに堤防が壊れないということだけを考えてつくったものです。ですから、コンクリートでがっちり固めています。しかし先ほど言いましたように、この写真でもわかりますが、随分子供がきて釣りをしたり、ちょっと遠くのほうに見えているように水遊びをしたりする。つまり堤防というのは洪水から都市を守ることが重要なのですが、それ

しかし、そういういろんな機能が要請されているということを往々にして忘れがちで、さっき言いましたようにアメニティ水準を高めてくると、水に親しまないといかんと、親水ばかりを考える。水に触れるようにするには、護岸の勾配をゆるくして水に下りて行きやすくしなければいけない。写真-2は私が撮った写真で余りよくないのですが、右側が水面です。緩勾配の護岸で、確かに五割勾配で非常に下りやすいのです。「要求」のaに応えた、水に下りて行きやすい護岸になっています。この要請に対しては「OK」です。しかしこれは子

でしょう。一つのことしか考えていないからです。

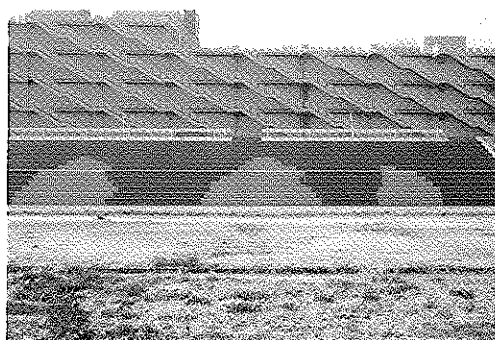


写真-3

写真-3はご存じの方もいるかと思いますが、北九州地方のある河川の階段護岸です。もちろんコンクリートでつくってあります。そこにこんなふうにタイルを張って、模様を書いています。何でこんなことをやるかという、私の想像ですが、地元の市民なり市役所の人に何か言われて、ともかく我がまち、我が市らしい個性を出して欲れないかといわれて、じゃあしようがない、ここはかつて炭坑地帯だったので、地域としてはボタ山の風景が名物だということで、タイルを張ってボタ山の風景を書きましたとなります。治水は治水、個性は個性とい

うふうに、別々に考えて張りつけるというやり方です。こういう例もデザインというふうには言えないのではないかと思います。



写真-4

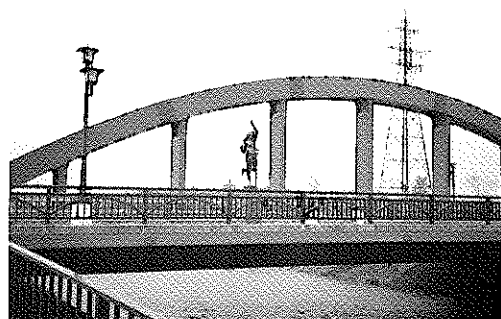


写真-5

写真-4はまぎれもなく建設省の事業です。建設省の方に案内していただいて、埼玉県内ですが、歩いて行くと、こういう堰があって、ゲートのところに絵が書いてあります。何で書いてあるかという、河川敷に桜草がきれいに咲いて、それが地域の名物だ。地域らしさ、個性を出すために、桜草を書いた。「篠原先生、いいでしょう」と言うから「とんでもない」と答えました。僕が小学校の低学年か幼稚園児だったらば、まあ、かわいらしいなと思うかもしれませんが、私は大人ですから、こんなものはいいとは思わない。本物がすぐ近くにあるのに、こんなコピーをわざわざ書く必要があるのか。こんなふうな例がどうしても多いのです。

河川の悪口ばかり言っているのもどうかと思しますので、橋のほうも取り上げます。そうしないと片手落ちになりますので。静岡県下のある橋です(写真-5)。川岸から見ると、こんな風に見えます。景観のことを一生懸命考えてデザインしたという橋です。私は静岡県の賞の委員をやっておりますので、強く反対したのですが、残念ながら賞をとりました。

これがどうしておかしいかという、構造的には単弦ローゼ橋で、ごらんのように非常

にごつい形で、いっぱいリベットを打ってあります。つまり、かつての設計のやり方そのままです。しかしそれと全然無関係に、歩道には彫刻が置いてあります。

要約しますと、車道と橋を支える構造のところは昔のままに設計しました（写真-6）。しかしこれではアメニティ水準が高まらないし、彫刻が何か置かないと芸術性が高まらない。というふうに思っているかどうかわかりませんが、歩道をカラー舗装して、彫刻を置いて、街路灯をデザインしました。歩道側がアメニティ、車道側は機能一点張りというふうになっています。別々に考えて、後でくっつける。こういうものは、後生の人から、あの当時はいいものをつくってくれた、いいデザインだったというふうには、どう考えても思われたいと思います。

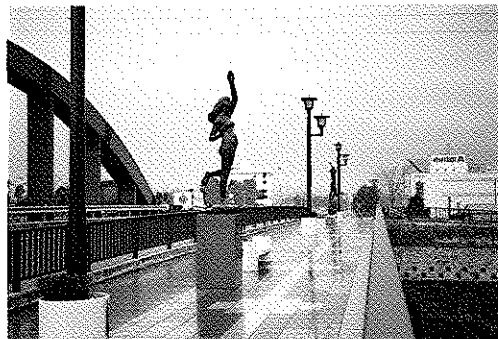


写真-6



写真-7



写真-8

写真-7も、こういう類の一つで、先駆的な例なので、余り悪口をいうとかわいそうなのですが、橋というものは単に歩いて通過できるというだけではなくて、橋の上にたたずんで、しみじみと川の風景を眺めたい。そういう「要請」aがあるとしますと、こんなふうにバルコニーをつける。あるいはテラスをつける。

確かに彫刻を置いてあって、高欄にもたれて、たたずんで見ると、川の風景がなかなかいいということになります（写真-8）。これは橋の上にたたずんで川の風景をしみじみ眺めたい、ちょっと若い人だったら、彼女と語り合いたいというのかもしれませんが、そういう要請に対しうまくこたえています。

しかし一步橋の外側に行ってみると（写真-9）、ここがさっきのテラスの部分ですが、これが桁から張り出しているものですから、落ちないように橋脚のところからつかえ棒を出して支えています。そうしますと「要求」のb、つまり川、河川敷、堤防の上から橋を眺めたときに、橋がいい形になっているか、きれいなデザインになっているかどうか、そ

ういう要請に対しては全くこたえていません。一つのことしか考えない。こういうのはだめなのです。

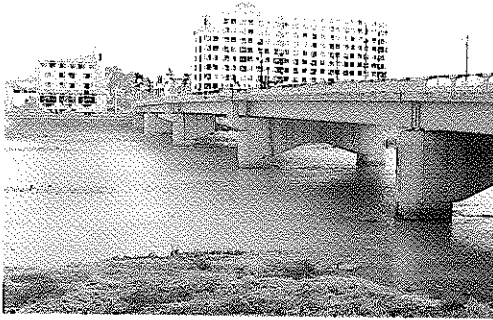


写真-9



写真-10

仙台の広瀬川にかかっている橋です(写真-10)。戦前の橋です。残念ながら橋のデザインに関しては、戦前のほうがちゃんとしていて、戦後になってデザイン水準が落ちた感じで、学生には、橋のデザインを見る場合は、戦前の橋にしておけと言っているのですが、やはりこんなふうにテラスが出ています。

ここ(テラスの下部)がちょっと汚いのですが、この間仙台に行きましたら、ちゃんと修復してありました(写真-11)。これがテラスの部分です。外から見てもおかしくないように、こういうデザインになっています。建築の言葉でいうと、迫持ちというやり方です。つまり外から見ても、橋の上に立って川を見るという要請に対しても、うまくこたえています。こういうものがデザインではないかと思うのです。

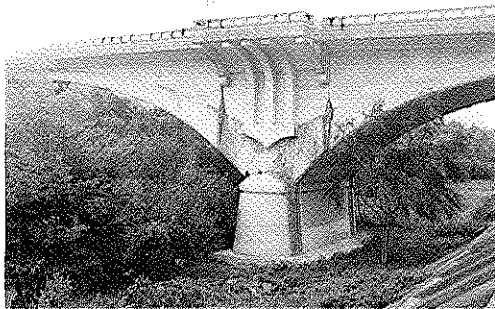


写真-11

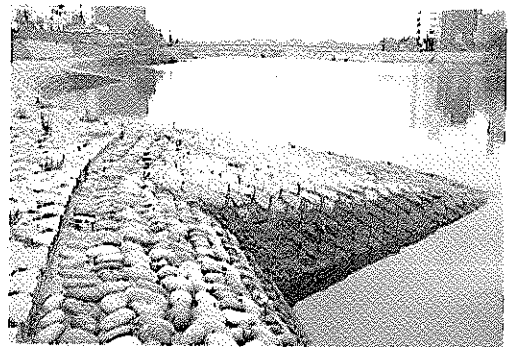


写真-12

次に川の例を出します(写真-12)。先日の川づくりの審査会で私も審査をしましたが、残念ながら私の意見は他の先生の意見とはかなり違って、私は太田川の設計が一番いいと思っているのですが、これは中村良夫さんが設計した太田川の護岸です。どうなっているかという、海に近いところなので、河川の方はご存じだと思いますが、流路を安定させるために、水制工がありました。何とか昔のイメージを伝えたいというので、こうい

う突き出した要素を持ち込んだのだと思います。しかしそれだけではなくて、ここをずっと伝わっていくと、水にふれることができそうだ。こういうのを親水象徴というのですが、突き出しにはそういう役割も持たせております。



写真-13

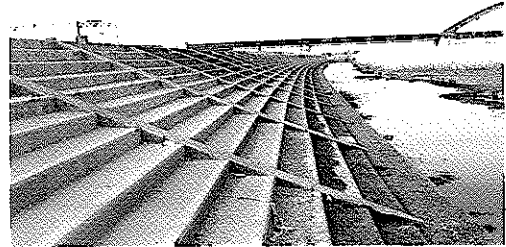


写真-14

遠くから見るとこんなふうになっておりまして (写真-13)、さっきの突き出しがこれですね。これを使うことによって、我々の専門の分野では「分節」というのですが、護岸の線を区切って空間に変化を出す。ここで一回区切りを入れて、ここで区切りを入れて、こうなっています。ですから、こういうデザイン要素を使うことによって、昔のイメージを何となく伝える。親水の装置にする。護岸の空間に変化をつける。こういう3つの役割を果たしています。デザインというのはこういう具合にやってほしい。親水のためには階段をつける。昔のイメージを伝えるためには何か別のものを置く。空間に変化をつけるためには、また別のもので対応する。それぞれ別々にやりますと、非常にごたごたとしたデザインになります。

この例 (写真-14) と比べれば、優劣は明らかですね。これは一つのことしか考えていません。つまり階段をつくって水辺に下りて行きやすくしようということだけです。そうしますと、言わなくてもわかると思いますが、何百mも同じ断面が続いて、うんざりするということになります。

“よい風景”の意味

- 1) 対象：物と物との相互関係
環境像
- 2) 前提：眺められる
3つの側面
 - a. 視覚的な
 - b. 意味的な (文化、歴史)
 - c. 生態的な
- 3) 設計概念 (指針)
視覚・意味・生態的な秩序
例1 造園：「用と景」(飛石)
例2 加藤誠平： ①消去法
「橋梁美学」 ②融和法 (橋と自然)
1936 ③強調法

図-2 景観のデザイン

我々がつくるものには必ずいろんな要請があるので、それを一緒に考えて、一つの形にまとめることを考えなければいけない。それがデザインです。一つの機能に対応して、ずっとそれのみでデザインできるというのは、きっとコンピューターのチップみたいなものだけではないかと思います。

次に、中学クラスか高校クラスになるのかどうなるかわかりませんが、景観のことを考える (図-2)。今までの話は単体のデザインです。景観のことを考えるということになりますと、これも議論し出しますと、いろいろあって面倒くさいのですが、今日は簡単に申します。先程のデザインは、

いろんな機能が要求されていて、それを総合的に考えてうまく一つの形にまとめ上げるという話だと申しましたが、景観のことを考えるというのは、そういう物と物との間の関係がどうなっているかということを考えることです。よく景観というと調和というふうに言いますが、漠然と調和というふうには考えない。例えば河川の護岸を整備するとします。そうすると、この河川の護岸は、例えば橋があるとすると、橋とどういう関係になっているか。あるいは後ろの町並みとどういう関係になっているか。そういうふうに具体的に相い方を見つけて、それで設計していくのがいいのではないかと思うのです。それが第1のポイントです。

次に、関係といいましても、いくつかの側面があります。普通、景観というと、見た目だけだというふうに考えられるかも知れませんが、先ほど話しましたように我々は大人ですから、パッと見たときに、外見だけで判断しているわけではなくて、意味的な判断も同時に下しています。何かモノをつくったときに、それが、その地域の歴史、文化に合っているかどうか。あるいは、今日のシンポジウムの主題であります生態的にいいのだろうか。こういうふうな判断を同時に下しているわけで、そここのところも考えた設計にしないと、景観の設計にならないということが第2の点です。

第3の点は、話し出すと長くなるので端折って説明いたしますが、景観のことを考える際には、造園の分野で昔からいわれている「用と景」という概念が一番いいのではないかと考えています。「用と景」とは何かというと、日本庭園でも狭い、ただ眺めるだけの庭は違いますが、少し大きな庭園になりますと、歩くための飛石が打ってあります。これはどういう考えで打つかというと、もちろんその上を歩いていくために打つわけで、当然歩きやすい、伝って歩けるようになっていないといけません。余り石が離れていたら、跳ばないといけません。歩きやすいように、こういうふうに石を置いていきます。しかしそれだけではなくて、日本庭園ですから当然風景を非常に大切にします。日本庭園はある意味ではそれが命ですから、現代の言葉でいうと、景観です。ですから「景」のことを考えないとはいけません。景観のこと、風景のことを考える。ちょっと離れて、座敷から日本庭園を見たときに、その置かれている石が日本庭園の風景を構成する役割を担っているかどうかということになります。そういうことを常に考えないとはいけません。

これが日本庭園の飛石のデザインで、千利休という人は「用」を6分に「景」を4分にと言った。歩きやすいという点を少し重視しなさいということです。その弟子の古田織部という人は、「用」を4分に「景」を6分にと申しました。庭園の景色を構成しているということのほうに、少し重点を置いたほうがいいのではないかといったわけです。どのくらいの割合にするかというのは、どちらでもいいことで、重要なのは、常にこの両方を考えるということです。従来の標準設計は、「用」を100%、「景」は0です。最近の装飾的な設計では、全然実際の用に役に立たないものを何か置く。つまり「用」が0で「景」は100%というものを置きます。それではまずいので、何かつくるとすると、日本庭園に較べて、我々がつくるところは用の条件がもっと厳しいですから、きっと「用」のほうは80%か90%で、「景」のほうは10%か20%ぐらいだと思います。場所によって違うと思いますが、しかし重要なのは決して片方を0にしないということだろうと思います。



写真-15

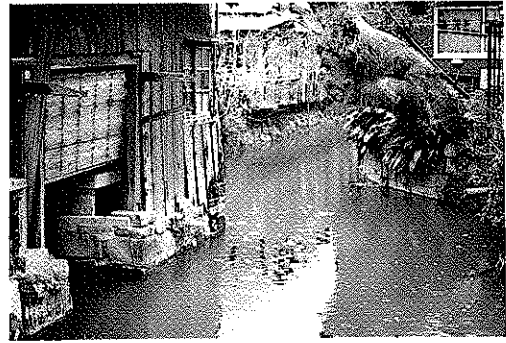


写真-16

またスライドを見ていただきたいと思います。

行かれた方は、きっと同意してくださると思いますが、九州の柳川は非常にいいまちです（写真-15）。水郷都市で、町なかを歩きますと、至るところに掘割運河といいますが、水路があって、建築もここに出ていますように、和風の伝統的な建築で、非常にしっとりとしたまちです。

前のスライド（写真-15）の掘割を道でいうメインストリートだとすると、水路にもこんな路地とか横丁みたいなものがある（写真-16）、つまり非常に小さいスケールのものがある、このところ（写真-16左下）は普通の住宅のお勝手口で、ここで昔お米をといだり皿を洗っていたりしたのだそうです。

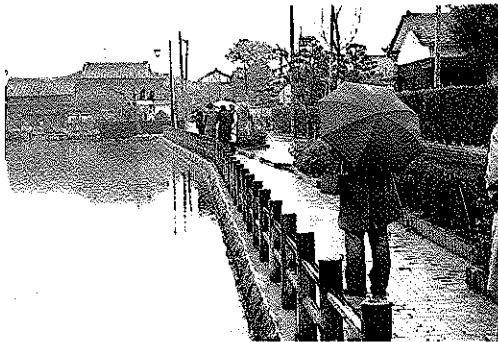


写真-17

しかし町を歩いていくと、唐突にこんなものが出てきます（写真-17）、これは何かというと、カラーのインターロッキングブロック舗装です。これは街灯です（写真-17中央上）。柳川は北原白秋が生まれたところですが、日本情緒の非常にしっとりとして落ち着いたところに、色彩的にも形としても合わないものが出来てしまう。景観的には非常にまずいわけです。「何でこんなことになっちゃたんですか」と市役所の人に聞くと、「ともかく景観のことを考えてまちをつくらなきゃいかん。我が市には非常に熱心な若手の職員がいて、景観の

ことをやらなきゃいけないので、先進的なところへ行って勉強してこようと、横浜に行っ
て勉強してきました。その成果です」ということですが、やっぱり、まずいですね。視
覚的にもまずいし、意味的にも合わない。こういう間違いがよくあります。次に見せる間違
いはちょうど逆の間違いです。

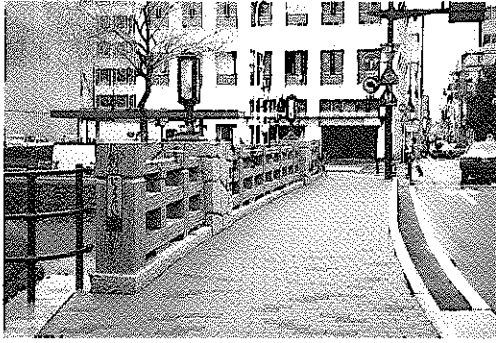


写真-18

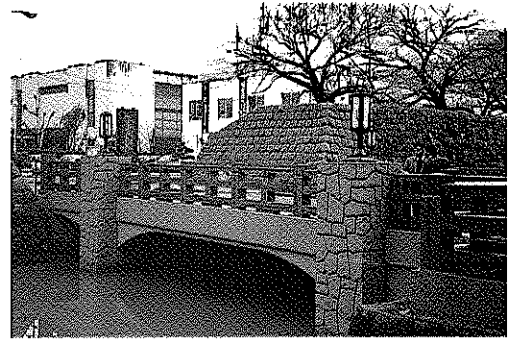


写真-19

この例(写真-18)は何でこのようになっているのかという、次のスライドを見てもらえばわかります。橋の高欄を、おわかりだと思いますが、本当はコンクリートなのですが、型枠を使って石みたいに見せたり、木みたいに見せたりしています。擬木、擬石です。

どうしてこんなことをするか。場所がお城の近くのなのです(写真-19)。ここがお城のお堀になっております。これが本当の石垣です。私の想像では、この橋を担当した人は、ここはお城の近くで歴史的に由緒あるところだ、だから景観に配慮しなきゃいかんよと強く言われたのだろう。だけど橋の本体の設計はほとんど終わっていて、しょうがないから、何かやらないと怒られるのではないかということで、やっぱり石みたいに見せなきゃいかん、木みたいにやりましょうと、こうやっちゃった。景観に配慮するということが、表面で、周りに調子を合わせる、調和させるという内容で受け取られている。こういうことではまずいわけです。

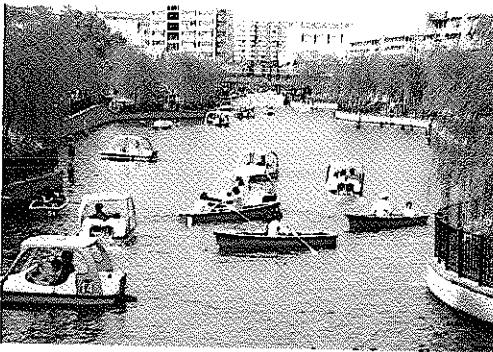


写真-20

写真-20には賛否両論があって、私は否のほうで、かつて区長さんには面と向かって申し上げたので言ってもよろしいと思いますが、東京の下町にある区の掘割運河です。悪くないじゃないかと言われると思います。パッと見たら別に悪くない。護岸を曲線にして柳をいっぱい植えてボートで遊んでいる。非常に楽しそうだ。見ただけならそうなのですが、何で悪いかというと、ここは徳川家康が江戸に幕府を開いて、しばらくしてできた掘割運河です。年代でいきますと1600年代の最初のころにつくられた

掘割です。それ以来ずっと江戸、東京の経済、社会を支えていた掘割運河です。歴史的に非常に由緒があるわけです。

我々がよく知っている歴史的遺産は、東京駅の赤煉瓦です。あれが竣工したのは大正3年で、つまり1914年で、今から80年ぐらい前の事です。

それに対して、この掘割は400年ぐらい前のものです。建築のほうには建築史という歴史をやる研究室とか講座があるので、あれは大事だといって保存することになりますが、残念ながら土木のほうには土木史という研究室も講座もないので、400年にもわたって江戸と東京を支えてきた由緒ある掘割である、大事だから保存しなきゃいかんという人はだ

れもないので、現在の楽しみのためだけに簡単に変わってしまう。歴史的な観点から言うと非常にまずいのではないかと思います。

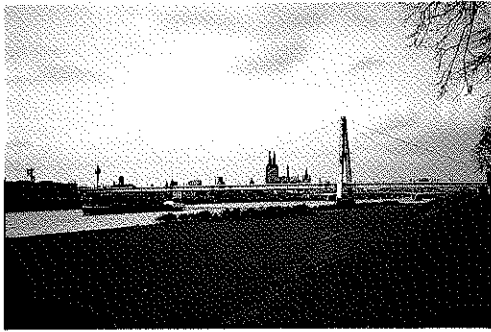


写真-21

これから何枚かのスライドで景観に配慮するということがどういうことかをもらいいただこうと思います。

皆さんも調査報告書とかレポートをもらいになればわかると思いますが、景観に配慮するというと、周囲と調和しなければいけないと、必ず書いてあります。それはどういうことか、もう少し具体的に考えたほうがいいのではないかと、先ほど申し上げましたが、以下はその例です。

これは有名な例で、ライン川にかかっている橋です(写真-21)。向こうに見えるのはケルンの大聖堂です。この橋の設計の

際の景観に配慮するということは何であったかということではなく、ケルンの大聖堂と一緒に眺められてもおかしくないようにする。又、水辺からケルンの大聖堂を見るときに、なるべく眺望障害にならないようにするという事で、文献を読みますと、タワーは片側に一本しか建てないという設計にしたのだそうです。こういうふうに具体的に考えないと、実際景観に配慮した設計というふうにはならないのではないかと思います。漠然と調和するといいますが、実際を見ると何が調和しているのかよくわからんという例が多いのですが、ここではこんなふうに考えたわけです。



写真-22



写真-23

これも有名な例です(写真-22)。シドニー湾にはハーバーブリッジがかかっています。1920年代の橋で非常にスケールの大きい橋です。昨年行って見て感銘を受けました。

この橋だけでもシドニーは有名だったのですが、その近くに島状に突き出ているところがあって、そこでコンペをやりましてオペラハウスをつくりました(写真-23)。ウォッツ

オンという人が当選して、こんなものができました。コンクリートのシェル構造で非常にきれいな建築です。



写真-24

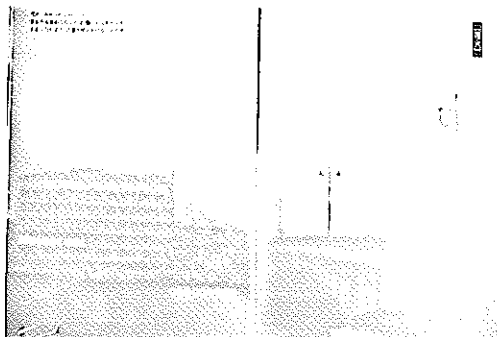


写真-25

こんなふうに、有名な展望の場所があって、そこに行くと、ものすごく人がいっぱいいて、ハーバーブリッジの雄大なスケールと、さっきお見せした非常に柔らかな曲線の建築とがツインになっています（写真-24）。観光パンフレットだとか海外ツアーの紹介を見ると、シドニーには必ずこれが出てきます。つまり橋と建築で、まちのイメージ、イメージアビリティと我々は言いますが、をつくっています。景観設計をこんなふうに考えられないかということです。

これは雑誌からのコピーで汚いのですが、我が国にもかつてはそんな考えがあったようで、これは隅田川です（写真-25）。これが両国橋で、向こうにあるのが両国の国技館です。花火のときの写真です。国技館と両国橋がセットになっていますよということだろうと思います。

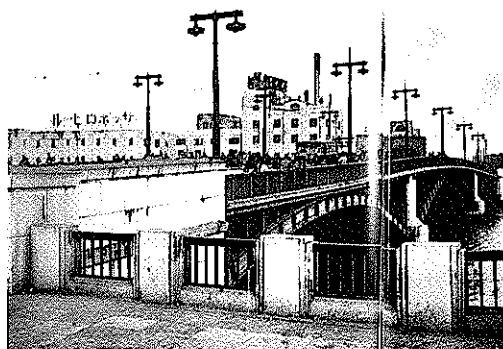


写真-26

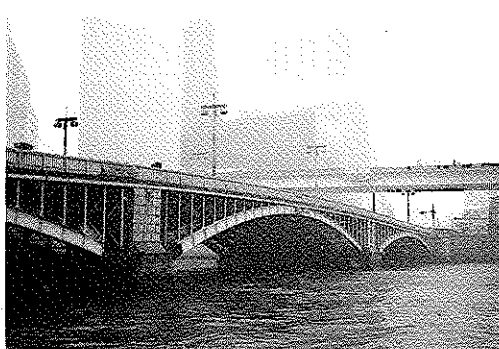


写真-27

これは大したセットになっていませんが、浅草のところにかかっている言問橋です（写真-26）。これが某ビール会社の建物です。昭和の初期です。

今これがどうなっているかという、こうなっています（写真-27）。この言問橋が70年ぐらい前の昔のままで残っています。新たに首都高がかかっています。向こうに某ビール会社の新ビルができて、これは噂ですから本当かどうか分かりませんが、聞いたところに

よると、不況でこの土地を売ってどこかに移転するはずだったのが、「ドライ」で当てて、業績が回復したので、ビルをつくった。ごらんになるとわかると思いますが、金色のビルです。これも僕の写真が悪いのですが、上の方は白くなっています。「何だ、これは」と思うと、これはビールのジョッキだというわけです。隣にこういう建物があって、ビヤホールになっています。キントン雲みたいなものが乗っています。学生はキントン雲と言わないで、ちょっとそれ以上ははばかりますが……。一体全体こういうものが、橋あるいは隅田川という存在を意識して、それとうまく呼吸が合うように設計してあるのかどうかとうと、はなはだ疑わしいと思います。そういうことに配慮して設計するというのが、景観設計ではないかと思ひます。聞くところによりますと、これはフランスのインテリア・デザイナーが設計したのだそうで、本国では到底こういうことは許されなそうです。

景観というものを、こんなふうにもうちょっと具体的に考えていただく。皆さんが河川の整備をするときに、さっきもちょっと言いましたが、あの橋はなかなかよくできているので、あの橋とどこかで、例えば材料とかデザインの傾向で調子を合わせよう。あるいは背後の町並みがこうだから、それに調子を合わせようと、こんなふう具体的に考えて設計していただきたいと思ひます。何となく調和するように考えました、なんていうのではなくて。

ここからは建築設計の悪口になるのですが、調和しようにもそんな立派なまち並みというのは現実にはほとんどありませんから、橋にしても護岸にしても、まち並みが将来調和してきつとよくなるだろうということを考えて、それをリードするような形でいいものをつくってほしいと思ひます。

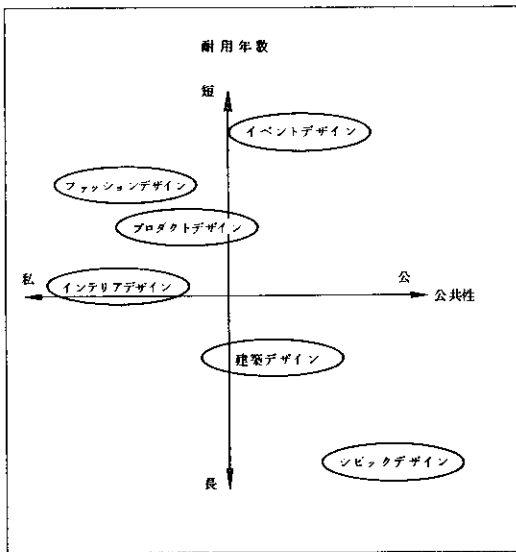


図-3 “シビックデザイン”の意味
デザインの寿命と公共性による
各種デザインの位置づけ

さて、これからが上級コースで、高校か大学になると思ひますが、シビックデザインということで、簡単にお話します。

冒頭に申し上げましたように、我々がつくるものは、ほかのものと違う。したがってデザインの考え方も違ってしかるべきだというのが私の考えです。何が違うのかをはっきりさせるために、1つ目に、耐用年数というものを考えます。施設のライフサイクルです。もう1つは、公共性ということを考えます。当たり前のことですが、この2軸で考えると、いろんなデザインは、こんな具合に分布しているのではないか。これは私の勝手な、何も調査もしないでつくった図です。例えばファッション・デザインと比べてみる。皆さんがネクタイとかシャツを20年も使いますかという、使いません。流行という

のがあって、ちょっとオシャレな人なら毎年変えるのではないですか。私はケチですので、4、5年は使いますが、しかし10年はなかなか使わない。そういうことになっていますから、当然デザインするほうの人も、流行を追っかけていいわけです。2番目に、汚れてき

たら捨てるだろうというふうに考えているから、汚れに強いネクタイなんて普通はつくらない。

ネクタイ売場に行きますとよくわかるのですが、いろんな種類のものがいっぱい置いてあります。今日の会場にいらっしゃる方にはないと思いますが、馬がハネているとか、竹藪が書いてあって虎が棲んでいるとか、タイガースファン向けだと思いますが、そういうものも置いてある。それはそれでいいんです。何でいいかという、好きな人がそれを買えばいい。そして締める。しかし我々がつくるものを考えてみると、橋でも河川の護岸でも堤防でも何でもそうですが、一旦つくったら、よっぽど特殊な事情がない限りは、30年、40年、さっきの隅田川の橋なら7、80年使います。そうなりますと、あの橋は流行おくれになったから、かけ替えようというわけにいかないし、汚れてきたからかけ替えようということにもなりません。汚れに強いデザイン、流行に余り左右されないデザインでなければということになります。ファッション・デザインに比べて地味なデザインにならざるを得ません。

公共性という点からいいますと、あの橋はどうも嫌いだ、見るのもいやだ、だからあの橋を使わないで一つ下流の橋を渡って通勤しようというわけにはいきませんから、どうしても、まあまあ7、80%の人が見て余り抵抗感がない、そういうデザインになっていないとまずいのです。虎の模様ではまずい。つまり公共財ですから。その辺を間違ると、なかなか後世の人に評価されるストックのデザインにならないということになります。



写真-28



写真-29

写真-28は極端な例ですが、こういうことをやりますと、もう取り返しがつきません。おわかりになると思いますが、汚れてくると、だんだんみすぼらしくなって、見るのもいやになってきます。これは高速道路の法面です。

こういうものが大事です。これは大阪城の石垣ですが、400年近くたっています(写真-29)。汚れてきたない、しみがついたりしていますが、変な彫刻よりよっぽど味わいがある。時間がたっていくに従って、だんだんよくなる。もうちょっと具体的に言いますと、材料になると思います。そういう材料をうまく使うかということが非常に重要だと思います。自然の材料というのは年数がたってくるとよくなってきます。プラスチックみたいな加工度の非常に高い人工物は、年がたつとともに、みすぼらしくなってきます。別にプラスチック業界に恨みがあって言っているのではありませんが、実際そうだと思います。

一言でいえば、シブシックデザインというのはストックになるデザインを考えましょうということで、もう少し具体的に申しますと、つくったときが完成ではなくて、どのくらい

がいいのかわかりませんが、10年先、20年先が完成だというふうに考えましょうということになります。しかし一口でそう言ってもいろいろなデザインがあり得るので、これからその例をお見せします。

これは明治44年に竣工した日本橋です（写真-30）。土木の人が構造設計をやって、上の飾りのところは建築の人が設計しました。工事には、今に換算すると莫大な金を使っております。しかし、ものすごく丈夫で、そういうライフサイクルで見れば十分おつりがきているのではないかと思います。こんなふうに年がたてばたつほど、何となく重厚な感じになるデザインが一つの方向です。



写真-30

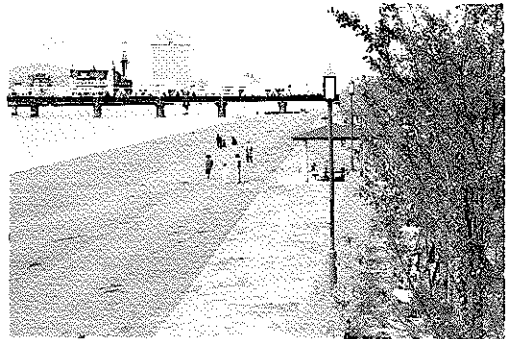


写真-31

そういうやり方もありますし、これは今度大賞をもらいました「信濃川のやすらぎ堤」です（写真-31）。こういう設計もシビックデザインの一つの方向だと思います。自分は眺められる対象ではない。自分は眺める場所を提供するんだという役割に徹しています。見ても全然面白くない。ただ単に高水敷と護岸があって、芝が張ってある。ですが、ここを歩く、ジョギングする、地元の新潟大学の先生に聞いたら、ときどき学生とここでパーティーをやる。そういう自由な活動ができて、山が見える。信濃川が見える。余りいい形ではありませんが、県庁が見える。こうなっています。こういうやり方も立派なシビックデザインだと思います。



写真-32

これなんかもそうで、多摩川の支流の野川です（写真-32）。河川関係の方は重々ご承知だと思いますが、下にはきっちり基礎がつくってあって、上を芝と草で覆っています。こういうデザインをすると、大体評判がよくないと地方の人は言います。

「せっかく整備に金をつけてやったのに、何もしないのか」。何かやったという感じを見せないと、まずいと思ってる人が多いので、その場合には、例えば文句を言う人が市長だとすると、「市長さん、そういうことを言っているようじゃ、あなたは、素人だ。何もやっていないように見えるデザインが玄人のデザインなんですよ」というふうに説得して下さい。と言っているのですが、

こういうデザインというのは、謙虚で、日本人の心情、日本の伝統に合っているデザインです。外国人にはなかなかこういうものはできないのではないかと思います。



写真-33



写真-34

写真-33は、今年の秋に行った時に見た橋です。マイヤールという人の戦前の橋で、こういうのもシブシックデザインの方向だと思います。むだな装飾は一切ない。構造の合理性だけで決めているデザインです。しかし誤解のないように申し添えますと標準設計とは全然違います。その川の表情に合わせて一品一品設計しています。コンクリートの打ちっばなしですが、非常にきれいです。

写真-34は側面から見たところです。あたかも板材みたいにコンクリートを扱っていることがよくわかる。その形が一々きれいです。ですから装飾なんかつける必要はないのです。うまく本体がデザインされていれば。



写真-35

こういうデザインもあります(写真-35)。これはマイヤールから言えば3代目になる人ですが、最近ヨーロッパでは売れっ子になっているカラトラバという人のデザインで、彼はスペイン人です。スペインで建築の勉強をして、スイスに行って土木の勉強をして、彫刻もやって、橋もやるし、駅も、ビルも、何でもやる。これはバルセロナにあるバックデローダという橋です。真ん中が車道で、アーチが両側の歩道のところにかけてあります。ここが歩道になっています。アーチはメタルですが、こういうところは全部コンクリートです。日

本は橋をやる人がメタルとコンクリートとできっぱり分かれていて、ほとんど対話がない。それには驚きましたが、合成構造というので、これからはやってくると思うのですが、スチールとコンクリートと一緒に使っている。これもちょっと表現は派手ですが、むだなものはありません。

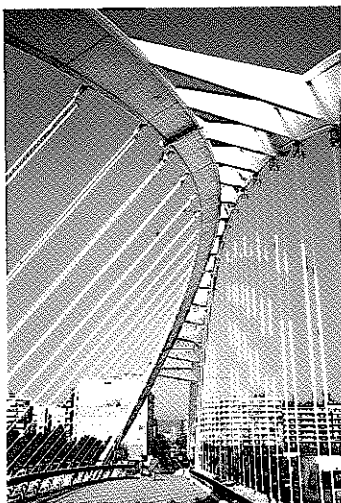


写真-36

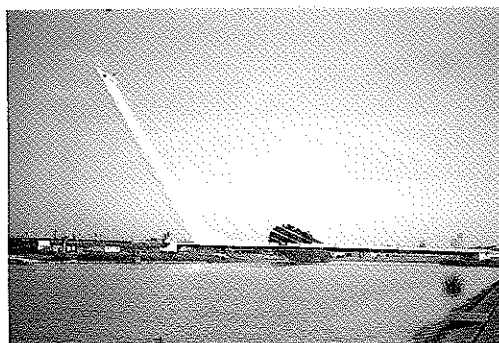


写真-37

写真-36は歩道上の眺めです。歩道がこういうふうにふくらませてあって、両側をケーブルで吊ってあります。少々つけ加えると、ここはちょっとむだです。あまりテンションがかかっていない。しかし非常にきれいな橋です。

その人の設計したアラミージョ橋という橋で(写真-37)、これは万博をやっていたセビリアの川にかかっています。タワーの長さが140メートルぐらいあって、これと橋桁とが対称になっていて、こちら側をケーブルで吊ってあります。こっち側は吊っていない。重さを持たせるために、中にコンクリートが詰めてあります。こうなると、橋というよりも彫刻です。好き嫌いはあるにしても、デザインはすばらしい。

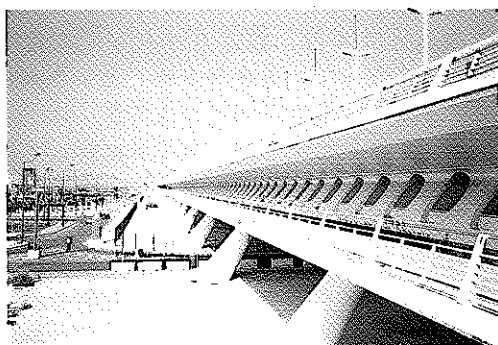


写真-38

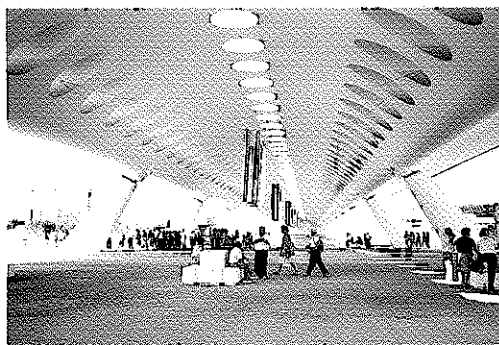


写真-39

もっと驚いたのは、それに続く高架橋で(写真-38)、同じカラトラバの設計ですが、ここが歩道の部分です(高架橋の中段)。この上が6車線の車道になっています。下が地上です。

下に潜りますと、こんな形の高架橋になります(写真-39)。上の中空のところに穴をあけて明かり取り。このピアで支えて、桁下がコンクリートの曲面になっています。こんな高架橋は見たことがなかった。日本の橋のデザイン水準も上がったと思ったのですが、むしろ引き離された。まことに残念です。

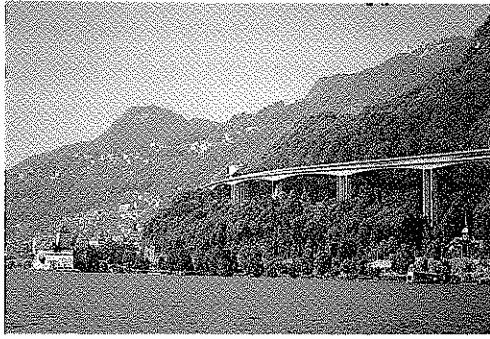


写真-40

これも有名なものですが、スイスのシオンの高架橋で（写真-40）、これは高速道路です。何を考えたかという、自然の山肌に傷をつけたくない。国際的に有名な観光地ですから。ヘリコプターで資材を下ろして、ここだけ穴を掘って、ずっとコンクリートを立ち上げていってつくった。工事に用いた道路にしても余り大規模なものをつくらなかったのです。生態系、環境系に配慮したデザインと施工です。おもしろいのは、それにとどまらず、最初のデザインの話に戻りますが、そういうことを考えると、今

度はこういう構造物がもろに見えてきますから、この高架橋の形をいい形にしないとまずいわけです。奇しくも生態保護と形のいいデザインというものが両立するといいますか、両方考えた設計にならないといけません。だんだんこういうことになってくるのではないかと思います。生態系のことを考えれば生態系だけでいい、デザインのことを考えるとデザインだけでいいというのではなくて、なかなか難しいですけど、両方をやりましょうということです。

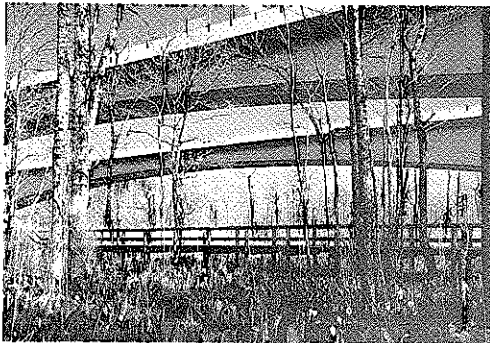


写真-41

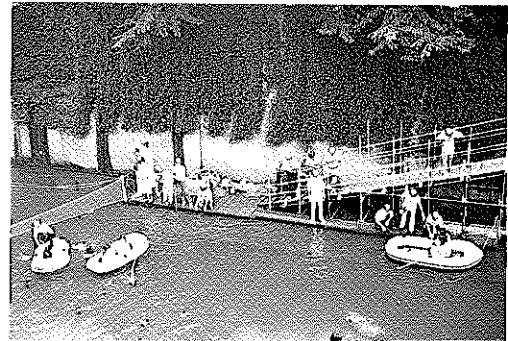


写真-42

日本にもこういう例が出てきていて（写真-41）、実物を見たことがないので、ちょっと怪しいところがあるのですが、まあ大丈夫だろうと思います。北海道のポロト橋という、日本道路公団がつくったものです。ここが湿原になっていて、ここにはピアを立てないでくれということで、スパンを飛ばして、スパンを飛ばしたので橋がいい形になるように、なるべく一生懸命考えたのでしょう。

こんな設計になっています。これも生態系のことを考えて、その結果橋のデザインも考えるという例です。

そうは言ってもシビックデザインだけやっていると、さっき言いましたように、かなり地味な大人にしかわからないようなデザインになってきます。地方に行くと、そんなことばかりやっていると、まちの品格は上がるかもしれないけど、若者がみんな逃げていっちゃ、もうちょっと華やかなところがないとだめだとよく言います。これをお見せるのは一番いい例だと思うからですが、これは石神井川です（写真-42）。板橋区が川にまつ

わるイベントをやって、ここに仮設の階段をつけて、川に下ろしています。



写真-43

こんなふうに、子供が遊んでいます(写真-43)。ニコニコしているような感じもしますが、ほんとは大変なので、コンクリートの護岸の高さが7メートルぐらいあって、水も余りきれいではない。そのときに区の人が、「こういうイベントをやるので、篠原先生、コンクリート護岸に絵を書きたい。はなやかにしたい」。私は前から区のお手伝いをしていたので、「書いてもよろしいけども、書いたら、今後一切区のお手伝いしない」と言いましたら、非常に困ったような顔をしていまして、苦心のあげくに考え出したのが、次のスライドです。

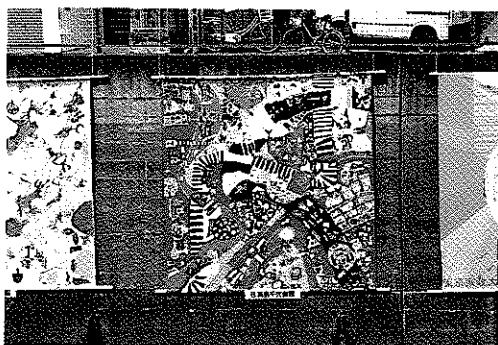


写真-44

こういうものです(写真-44)。布にかいて、幼稚園の子供です。こっち(写真右側)は家政大学だから女子大生。それぞれに書いてイベントの期間だけ吊り下げる。イベントが終わったら取ってしまう。そうなりますと汚れるということがなくていいわけです。評判が悪かった絵は、来年は出さない。まことにいいわけで、それは半分冗談ですが、重要なことは、毎日毎日何十年にもわたって人の目にふれる部分は、シックデザインでやらないといけません。イベント・デザインというのは、イベント

のときだけ華やかにすればいいので、イベントデザインとシックデザインをうまく使い分けるといことです。間違っても一緒に考えない。このごろの例を見ていると、今日スライドを持ってきませんでした。イベントをモチーフにした橋とか護岸の整備も多い。祭りのときだけ見たいのに、毎日祭りのまがいものを見ないといけない。はっきり区別して使い分けるといことが非常に重要ではないかと思えます。

最後に太田川の話を行います。私は太田川的设计が今までの川の中で一番いいと思っていて、今手掛けているもので何とかそれに追いつこうと思っていますが、残念ながら今回の応募には非常に貧弱な資料しか出てこなくて、皆さん、その良さがよくおわかりにならないかったです。

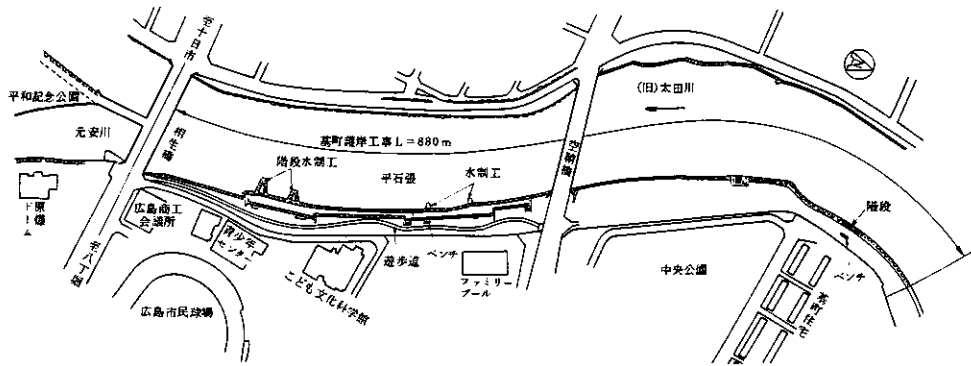


図-4 太田川基町護岸平面図

図-4は第1期工事でやったところですが、図の左端が原爆ドームです。橋がかかっている、ここは三叉になっている相生橋という有名な橋です。空鞆橋下流側左岸のところがシックセンターといいますが、いろいろな公共施設が集まって、空鞆橋上流側左岸が公園になっています。ここが最初にやった護岸のところですが、さっきお見せしたのはこの部分です。重要なことは、空鞆橋下流側の区間の設計と、上流側の区間の設計が全然違う調子になっていることです。下流側は何でこうなっているかという、後ろにいろんな建築がありますから、それに合わせて都会的な感じで設計していく。上流側は後ろが公園ですから、もっと伸びやかな、田園風というちょっとおおげさですが、そんなふうに設計しているということです。後で原爆ドームのところもちょっとお見せします。そこでは広島という原爆を受けた都市の記憶に合わせて設計しています。

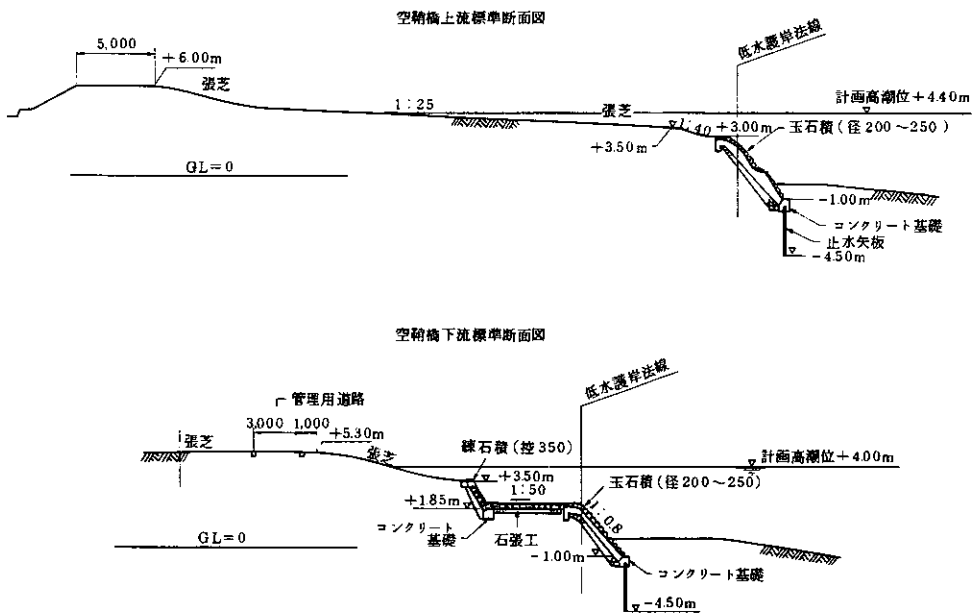


図-5 太田川基町護岸標準断面図

区間の違いが、護岸にどんなふうに反映しているか。こんなふうになっています（図-5）。ご承知の方もいると思います。空鞆橋下流の部分は図-5の下図ですね。こういう風に階段で落差をとって、水辺がプロムナードで歩けるようになっています。低水護岸部に、ところどころ水制工みたいなものがあります。

空鞆橋上流部のほうになりますと、図-5の上図の護岸でやっております。先程のような段差みたいなものを設けなくて、全部芝で処理して、コンクリートで巻いた設計になっています。重要なのは、伸びやかに設計しているということと、僕が設計したわけではなくて、中村先生が設計したのですが、堤防と高水敷を上下できちっと分けるのではなくて、ラウンディングでなめらかにつなげているという点です。ですから橋を境に、空鞆橋というのですが、上下流が全く違った調子になっていて、非常にうまい設計になっています。

スライドを何枚かお見せします。

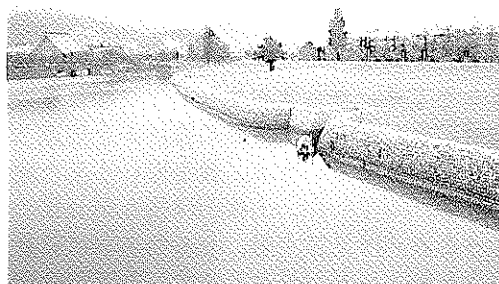


写真-45



写真-46

写真-45は上流側のところです。巻いた護岸になっていて、これが階段のところ（護岸のへこんだ部分）。高水敷には建設省担当者の大人の知恵で、木が残っています。

巻いた階段の部分です（写真-46）。ああいう護岸のところに階段をつけるというのは非常に難しいのです。私は前に研究したことがあって、どういうふうにつければいいか大体わかっているのですが、そういう意味ではうまくついています。しかしちょっと固いかなという感じもします。

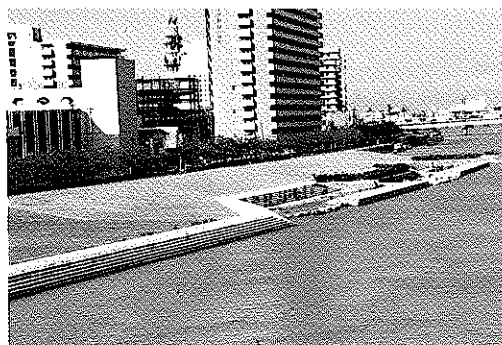


写真-47



写真-48

写真-47は大賞をもらった「信濃川のやすらぎ堤」の階段の設計です。非常にかたいです。この辺のデザインはよくないと個人的には思います。もうちょっとよく考えて設計しないとイケません。

写真-48がさっきの太田川高水敷のラウンディングの部分です。非常になめらかです。堤防で、高水敷で、護岸でというふうに分けしないで、なるべく連続するように設計しています。



写真-49

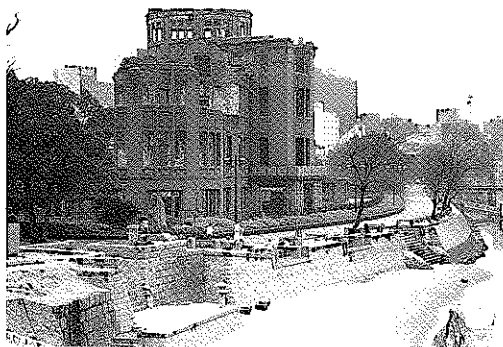


写真-50

中村先生に聞いたら、ただ一つ残念だったのは、写真-49の左側が公園で、ほんとはこの形をずっと続けて川を歩いていくと自然に公園に入っていく、公園を歩いていくと川に入っていけるといふふうにしたかったんだけど、どうしても管理境で、こっちが道路で、公園で、こっちが河川だといふので、一体的に設計できなかった。そこが残念だといふふうにおっしゃっていました。

写真-50は原爆ドームの前のところです。

水辺の景観設計

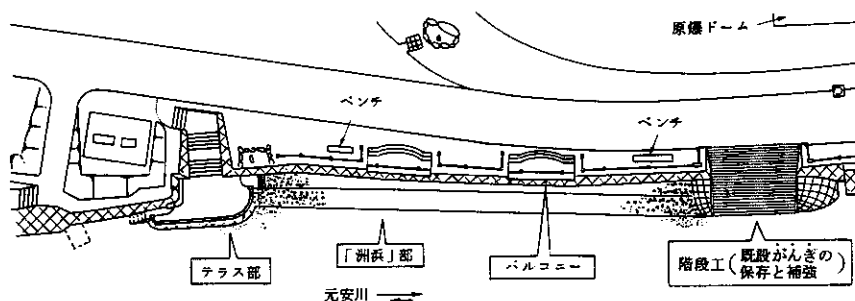


図-6 元安川原爆ドーム前親水テラスとバルコニー平面図

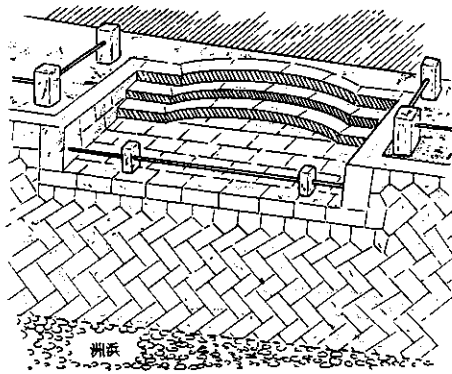


図-7 原爆ドーム前護岸天端バルコニー透視図

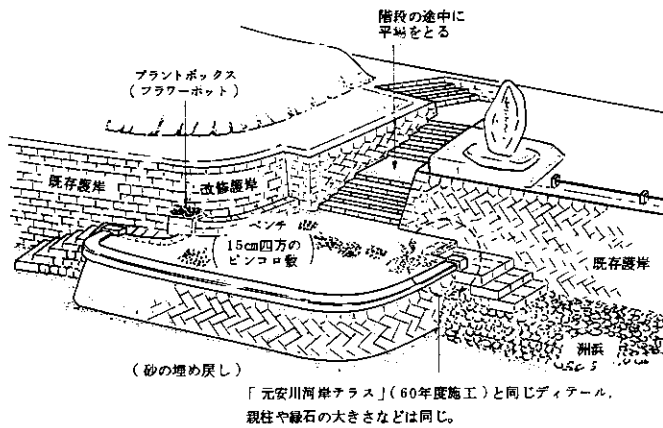


図-8 原爆ドーム前根固め親水テラス(魚見台)透視図

プランはこんなふうになっています(図-6、7、8)。ここが原爆ドームで、ここがテラスの部分です。ここは干潮区間で随分水位の差があるので、砂をつけたのだと言っていました。この辺はさっきのところと比べて、もっと都会的な感じで設計しています。ほんとの都心ですから、それに合わせた設計にしています。同じ河川の中で、後ろの土地利用とか場所の特性に合わせて設計を変えているのがよくわかりだと思います。ただ基本的には自然石をうまくつかってずっとやっていますので、全体の調子はそろっています。

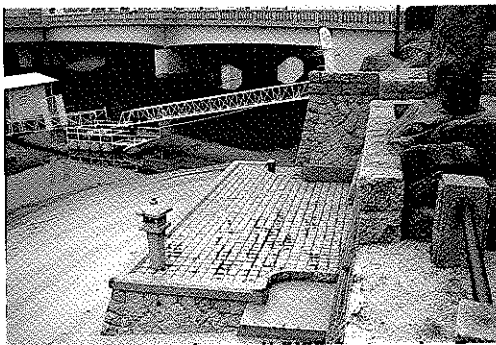


写真-51



写真-52

写真-51は上から見たところです。これは何だか知らないけれど、遊びでしょう。鎮魂の意味を込めて、灯笼を置いたりしている。

写真-52は灯笼流しをやっている時の写真です。人が集まっております。

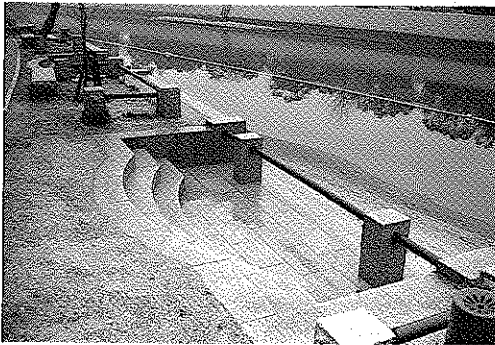


写真-53

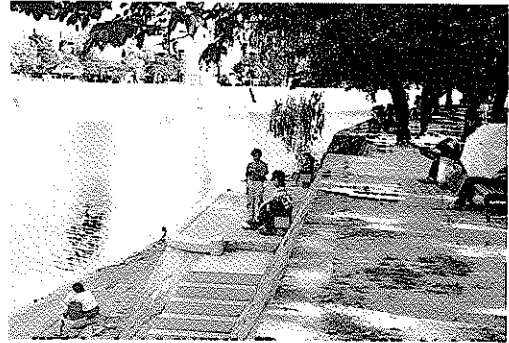


写真-54

写真-53は図-7のテラスのところ。いくら何でも都会のホテル風過ぎるのではないかと個人的には思いますが、きちっと設計してあります。

写真-54はそのちょっと下流の対岸側のテラスです。物見台とか魚見台とかいっているようですが、ちょっと張り出した部分。

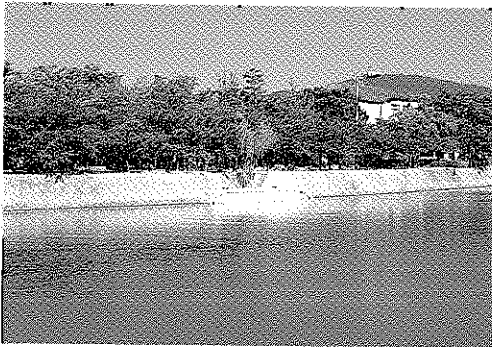


写真-55

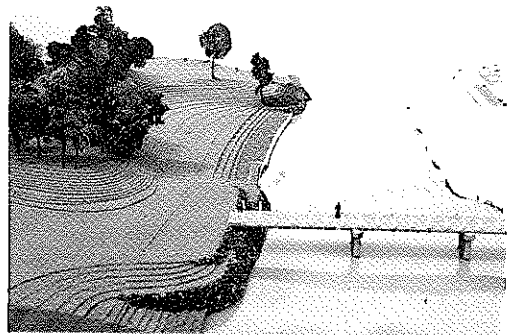


写真-56

写真-55は対岸から見たものです。ちょっと違う場所です。たしか最初に話がきたのは松浦君が太田川工事にいたときだから、昭和51年で、それからずっとこつこつと毎年少しずつやっている。こういうのがシックデザインだろうと思います。もう20年近くやっているんでしょうか。

写真-56は岡田さんの設計した野川の模型です。二子玉川のところ。最近はこちらに限りませんが、橋をやったり川をやったりするときは、必ず模型をつくってもらっています。コンピューターグラフィックスでもいいのですが、絵はごまかせますので、私は余り使わない。必ず模型をつくる。この間も、ある工事事務所の人に「デザインを検討したいので模型をつくってみてください」と、わりとくどくど言ったのです。紙で簡単につくってくれ、スタディー模型だからと言ったのだけど、完成模型のような大きいものをプラスチックでつくってきて、何百万もかかったのではないかと思いましたが、これは

紙で簡単につくっているものです。



写真-57

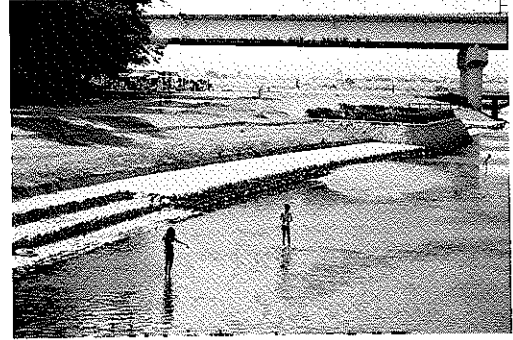


写真-58

ここは野川のところです（写真-57）。施工前だと思います。

こんなふうになっています（写真-58）。これは聞いたところによりますと、水位が上がってきて、もう水にひたるところギリギリぐらいで、芝と石の部分とを分けたのだと言っていました。ここが階段になっている。この辺はデザイン的によくないと思います。見て変な感じがします。



写真-59



写真-60

写真-59は芝のところですが、これも、こんなふうにならざる勾配をつけてあって、水はけがいいようにした芝ののり面です。

写真-60は本川側です。野川との間のところに、区のほうで整備した池があります。私は通勤途上なので毎朝見ておりますが、よくないですね。川が増水して一回水が溢れると、メンテナンスが大変で、しょっちゅう洗っている。都市公園の設計なのであって、あれは川の設計ではないと思います。こっちの本川側は、こんなふうに単純に処理しています。

これは岡田さんが設計したのですが、こういう面をつくったのと、後に出てきますが、水制工みたいなのをちょっと出したのと、ここが実はミソです。ものすごく小さな部分ですが、ここに何十センチかの段差をつけております。座りやすいわけです。デザインというのはどういうふうに人が水辺を使うかということをよく考えて設計しないとイケない。ほんのちょっとしたことが使いやすい、楽しいという感じにつながってきます。



写真-61



写真-62

こんなふうに出ています。
私も電車からいつも見えています（写真-62）。非常に人気があります。非常に形がシンプルです。



写真-63

写真-63は津和野の川です。写真手前が道路で、左上が落校のところで、ここに有名な水路があります。その裏側に川がありまして、橋の下流側を今やって、工事は大体こっち側が終わりました。こっち側が来年度の予定です。上流側を今設計しています。

写真-64の右側が右岸側です。ここが道路で、用地の幅が足りないものですから、石垣を、最近の傾向とは逆に、石積みの護岸を立てて、3分勾配にして、つまり急にして、石を積んで、それも上のほうは小さい石で、下のほうは大きい石で、目地を深くして、泥がついて草が生えるのではないかということを考えてやっています。あとは、下に捨石をしまして、ここにも土が乗って草が生えるだろう。簡単な模型ですから、ここは白くなっていますが、将来は水草あるいは草が生えてくるだろうという考えです。上の斜面のところ、1m半から2mぐらいの幅しかないんですが、対岸から見たときに、石ばかりだといやなので、ちょっとこういう勾配をつけまして、ここに土を入れて、芝を張ったり草を入れたりする。道路側はパラペットになっています。

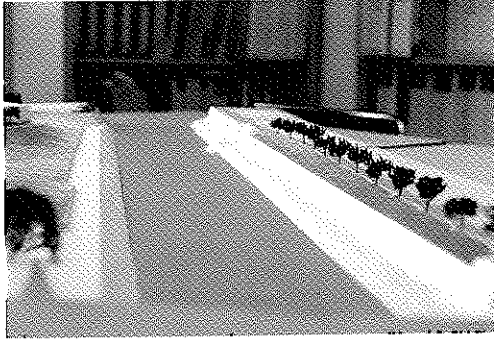


写真-64

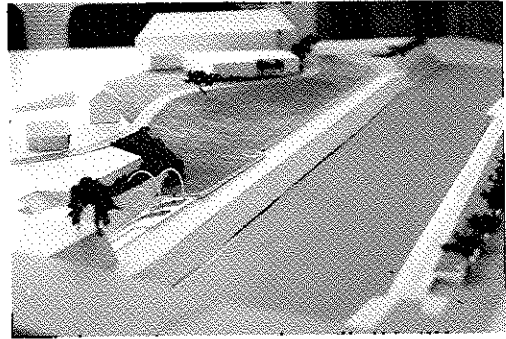


写真-65

所々くり抜いて桜の木を植えています。その裏の面は遊びで石州瓦を使っています。これは、もうできました。まあこんなものかなというのができました。

こっち側の、ここは有名な津和野藩の藩校があったところで(写真-65左側)、これは実は地元の人がえらいなと思っているのです。私は余りそういうことはしないのですが、一つ演説をぶってやろうと思って、町長さんとか商工会議所の人とか観光の人に集まってもらって、川というものは背後と一体で整備しないと絶対だめだ、いいものにならん、と言ったら真に受けてくれて、こっちの土地を河川側で買収してくれるということになりました。今はこんな形になっていないのですが、こういうふうに、うねる曲面にしようと考えています。こっちが河川敷です。背後の造園の設計もしないといけない。

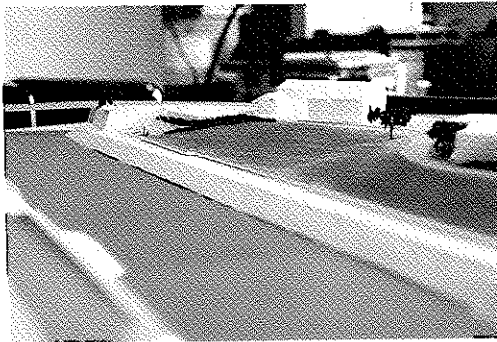


写真-66

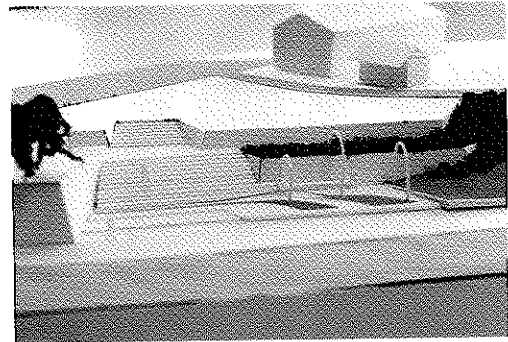


写真-67

上流の方からはこんなふうに見えます(写真-66)。こうなれば河川として非常に魅力が出てくる。これだけ余裕が出てきますから。これが藩校の建物です。歴史的に由緒のあるものです。

これは(写真-67)橋のたもとのところに何かいい木を一本植えよう、桜にするかカエデにするか松にするか、まだもめています。一本いい木を植えて、大振りの階段で、舞台に下りていくみたいに、川に下りて行けるようにしようと考えています。

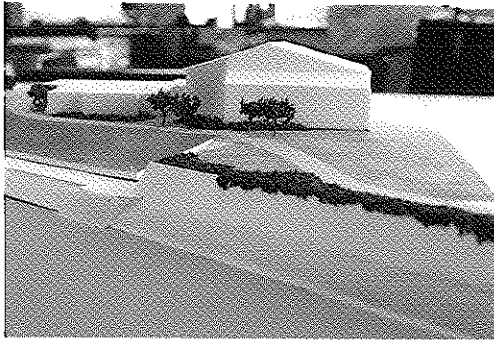


写真-68

これは（写真-68）、その上流のシメのところです。

時間が5、6分経過してしまいましたが、最後におさらいをしますと、我々がモノをつくっていく上で、まず第1にそもそものモノをつくるデザイン、次に景観を考慮ということ、最後にシビックデザインということを考える。そのステップを踏まないと良いものはできないということを申し上げました。後半では私がよく知っていたり、多少関わっていて、いいと思っている川の最近のデザインの例を、簡単に紹介

いたしました。

今日こられているのは役所の方も多と思うので言うのですが、何よりも重要なのは、時間がもらえないと十分な検討ができないということです。デザインは細かいですからね。昔みたいに標準の断面図一枚かいて、これでやれというのなら簡単ですが、細かいところになってくると、20分の1とか30分の1の図面をかかないといけません。時間をとるのだから、それに応じてお金も出してもらわないと良い設計はできません。

最後につけ加えますと、私みたいなものに頼んで、要するに大学の先生ですが、「めんどろ見てよ」、あとはよくわからないけど、工事事務所とか従来型の設計会社で大丈夫だろう、と考えることは間違いです。設計はすごく細かいところを見ないといけませんから、私が何回かアドバイスするぐらいではいい設計はできません。根本的なところはアドバイスしますが。今後は良いデザイン事務所を育て、理解のある発注者を育てるということが非常に重要ではないかと考えます。長時間にわたり聞いていただきまして、どうもありがとうございました。

講演名：(財)リバーフロント整備センター設立5周年記念セミナー
「人と自然にやさしい川づくりセミナー」

開催日時：平成4年12月1日(火) 10:00~17:00

開催場所：東條会館5Fスタールーム

講演者紹介

東京大学工学部教授

篠原 修

1945年11月22日 栃木県生まれ

東京大学工学部土木工学科卒業、東京大学工学系大学院土木工学専攻修士課程終了。
工学博士。

建設省土木研究所、東京大学農学部助教授を経て、現在東京大学工学部土木工学科教授。

専門：景観工学、設計、計画思想史

著作：土木景観計画（技報堂出版）、街路の景観設計（共著、技報堂出版）、水環境の保全と再生（共著、山海堂）、景観づくりを考える（共著、技報堂出版）、港の景観設計（共著、技報堂出版）